

# CHAIR? GALLERY

## 現代北欧のプロダクト デザイン展

1980年代から現在まで、北欧の国民性から生まれた椅子や小物を織田憲嗣氏がセレクト。お手本にしたくなる、美しく豊かな暮らしぶりが見えて来ます。

2011年6月1日(水)~10月23日(日)  
10:00~18:00 (月曜休館)  
チェアーズギャラリー (旭川市宮下通11丁目 蔵田夢 TEL.0166-23-3000)  
■主催/旭川デザイン協議会、織田コレクション協力会



ASAHIKAWA DESIGN ASSOCIATION

### 旭川デザイン協議会

〒070-0030 旭川市宮下通 11 丁目 蔵田夢  
コレクション館内

Tel.0166-23-3000 Fax.0166-23-3005

E-mail ada@ada-jp.org

Hp <http://ada-jp.org/>

2011 Voi.23

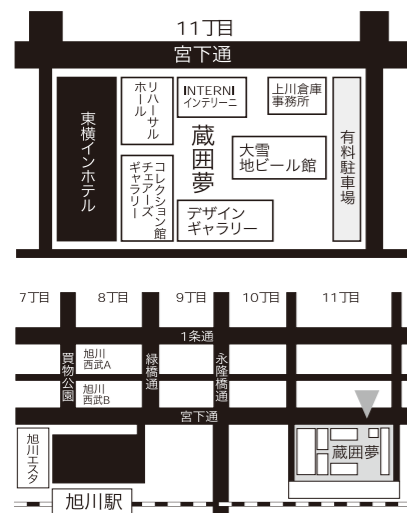
発行日/2011年5月13日

発行/旭川デザイン協議会

発行責任者/小林 謙

編集/広報事業部

印刷所/株式会社製版旭川支社



ASAHIKAWA DESIGN ASSOCIATION  
Design News 43<sup>rd</sup> vol.23



11年目のデザイン史を作ろう

今、この時代、このまちで、デザインができることは何か。  
10年という節目の年から新たな一歩を。

イン史」を発刊することができました。

時代はいろいろな意味で転換期に入り、東海大が芸術工学部の旭川からの撤退を決めたこの時期、何かしなければ、との気持ちがそこにありました。また私自身、北海道で、旭川で活動や教育・研究がどのように展開されてきたのかを正確に把握していたわけではなく、無我夢中で、27年間突っ走ってきました。そこで、一度じっくり旭川のデザインを俯瞰してみたかったです。

先日、どなたかとの話の中で、ADAが発足して10年経ったが「まだ10年か」と、お互いそんな感じをもちました。旭川で二十数年、またトータル40～、50年にわたりデザイン活動してきた身にとって、10年なんてついこの間という感じがします。

しかしこの間も、状況は大きく変化しています。教育では、全国的に少子化が教育機関に大きな影響を及ぼしています。経済の閉塞状況、産業構造の変化がそれに重なり、特に私立大学は、体制、定員はじめ様々な面の見直しが迫られています。

今年発表された東海大学の旭川からの撤退はそれらからの決定でした。

道立旭川高等技術専門学院は状況の変化に対応して教育内容を色々と試行しながら今日に至っています。

北海道教育大学も激しく体制を変えてきました。残念ながら旭川校の芸術関係は、教員養成の一部を除き岩見沢に一本化されることになりました。

それから就職が医学系など一部を除きほとんどの分野で大変厳しい状態です。皆さんの身近にもおられるかと思いますが、3月31日になっても就職の目処がたない卒業生は、昨年と同様に少なくありません。

このような中、国が地域を主導していたこれまでもに対して、文科省もですが、これからは地域の動きが全体の方向性に大きな影響を与えるであろうと思われる、そんな状況になりつつあります。

旭川のデザイン活動を、デザイン教育の経過を含めて「旭川デザイン史」に書きましたが、事実を記録整理し、これまでを振り返ってみることは大きな意義が



小林 謙

東海大学芸術工学部くらしデザイン学科教授、東海大学北方生活研究所所長、旭川デザイン協議会会長、北海道デザイン協議会理事、旭川市景観審議会会長、北海道インテリアコーディネーター協会特別会員、日本インテリア学会北海道支部長、日本インテリアデザイナー協会会員

をやらうぜと言って、なおかつその冊子を編集していただいております、私の先輩であります澁谷先生のほうからですね、地域と創造ということで、教育というようなことをまず通して、この地域と、他地域、札幌にもいらっしゃいましたので他地域の現状ということ比べな考えを、ちょっと述べていただきたいなあというふうに思います。だいたい5分くらいかな、2分以上6分以内くらいでお願いします。

## 自立した地域の創造力を

澁谷 こんばんは。この四半世紀にわたり旭川でデザイン活動を共にしてきた皆様とここに一堂に会することができ、感無量です。

ADA創立10周年記念行事をしよう、この際に旭川のデザインの歩みを綴ろうと言い出し、その結果、半年強の短期間でしたがお手元にお配りした「旭川デザ

した。

ただし、今日は私のほうではシナリオを一切作っておりませんし、パネラーの方たちにもこんなことを話してくださいなんていうネゴシエーションは一切ありません。ま、簡単に言えば行き当たりばったりでいきたいと思っておりますので、場合によっては、仲間内の皆さん方でございますので、ひょっとすると会場にマイクが飛んでいくこともあるかもしれませんが、それなりに緊張して聞くようにしてください。それでは座らせていただいで話を進めたいと思います。

私のほうで用意したのはこれだけ、「地域と創造力」ということでございますけれども、ここに本来だったら4人それぞれ違う分野の方たちに来ていただいてお話を伺うという形になっておりますが、今日は3人でございます。

それで、まず最初に、それぞれのお立場から旭川地域、上川地域といえますか、この地域における特にモノ作り、あるいはデザインといえますか、そういったようなものに対しての現状というようなところのお話をおうかがいしたいと思います。

澁谷先生は私のほうからいくと教育というような分野が最初になるかなあとと思いますし、長原さんの場合は家具という分野が基本になるか、あるいは木工という分野が基本になるかと思えますし、小野さんの場合はグラフィックや宣伝ということを通して現状を語っていただくというのがまず最初の質問でございます。

その次に、そういった分野の中で今抱えている問題というようなことを少しお話ししていただいて、さらに、だから将来はこうしたいんだというような話を少ししていただく、そういう流れでお話をうかがいながら、最終的には旭川デザイン協議会というのはこれからどういう活動をしていくのが最も良いのだろうというところに話を結ばせていきたいなあというのがコーディネーターの腹つもりでございます。そんなところでお話をおうかがいしたいと思います。

それでは、まず最初にですね、今日は、先ほど伊藤さんのほうからもご紹介いただきましたけれども、この10周年



会場 旭川ターミナルホテル6階 慶雲の間  
日時 平成22年10月22日(金)

### ■パネラー

澁谷 邦男 北のデザイン研究所所長、東海大学名誉教授  
長原 實 (株)カンディハウス会長、旭川家具工業協同組合会長  
小野 慶治 デザインオフィス・オノ代表、旭川広告デザイン協議会名誉会長

### ■コーディネーター

小林 謙 東海大学教授、旭川デザイン協議会会長

### ■進行

伊藤 友一 旭川デザイン協議会専務理事

じの方だと思います。今日、桑原さんが都合がありまして欠席となってしまいました。それをご報告申し上げます。

また、お手元に入っております旭川のデザイン史は、今回を記念して澁谷先生がリードを執られ作られたものでございます。この中で年表がございますけれども、こうやって改めて見ると旭川についてのデザインの系図みたいなものがわかるかなと思っております。90年代に入ってからこのデザイン協議会が発足して丸10年が経過し、11年目に入っております。今回はそれを記念して式典をさせていただくことになりました。

それではパネルディスカッションを始めたいと思います。お名前をお呼びいたしますので壇上にお上がりください。澁谷邦男様、長原實様、小野慶治様、コーディネーターは小林会長です。よろしくお願いいたします。

## 旭川デザイン協議会 発足10周年記念 パネルディスカッション テーマ「地域と創造力」

3人のパネラーがそれぞれの分野から、旭川でデザインにかかわる仕事をするこの意味や、デザインが地域にできること、旭川デザイン協議会のこれからについて、熱のこもった論を展開しました。

伊藤 第一部、パネルディスカッションを始めたいと思います。

私、専務理事をさせてもらっております伊藤と申します。よろしくお願いいたします。

今日は皆様お集まりいただきまして誠にありがとうございます。函館、帯広、札幌、東京の方からも、いろんな方が駆け付けていただいたことに感謝いたします。

パネルディスカッションですけれども、第一部ということで、10周年を機に、我々の先輩であります今日のパネリストの方々には後ほど表彰をさせていただこうと思っている方々でもございます。それぞれの立場、分野において旭川のデザインの振興を図られ、その礎を作られてきた大先輩と言いますか、大御所と言いますか、の方々でございます。そのおかげで私たちが今、歩む道しるべを見失わずにやってきているのかなと思います。

お手元にありますデザイン協議会の表彰者およびパネラーという一枚のシートがございます。改めて私の方からこれを読むことはいたしません。皆さんがご存

小林 皆さん、こんばんは。ごあいさつを専務理事のほうからしていただきましたので、私のほうはごく簡単にさせていただきます、遠くからご参加いただき、どうもありがとうございます。

さっそくパネルディスカッションを始めさせていただきますけれども、最初だけちょっと立ってお話したいと思えます。今回このパネルディスカッションのテーマを何にするかと、担当のほうから要求が私のところに来まして、即、地域と創造力と言ってしまいました。後で大変なことを言ってしまったなっていう気もしているんですけども、私の頭の中で常に最近こういう言葉が飛び交っているものですから、言われたときにすぐそういう言葉がぽこっと出てしまいました。

私ども特に旭川市においてデザインの仕事をしている人間にとって、環境がいろいろと変化している現状があるということを考えて、旭川市の中でデザインを通してどんなふうこれから先の産業なり生活、そういったようなものを作っていくのかなということを常に考えていたものですから、こういう話が出てきま

あると思います。現状を正確に把握してこれからを考えるうえで、歴史は本当に多くを教えてくれるのです。

国の大きな方向をこれからも見ることは勿論ですが、それ以上に、地域が、自分達がどう歩んできて、今どうあるのか、そしてこれからどうすべきなのか、そこから行動の方向を定めることなくして、前に進みようがない状況になっていると感じております。

そして、今迄たいへん恵まれていた旭川の産業、生活、文化の「創造」に密接に関係するデザインなどの教育環境及び体制は、時代の波に大きく揺すぶられて、まさに最悪の事態に突入しようとしていることが分かりました。

これを打開するには、地域自ら考え行動する以外に道はなく、また、そのような時代、地域の時代になっているのだと考えるのが正解です。最悪の状況に直面しているのは事実ですが、それを大きな転機と捉えて、地域が、旭川が自ら考えた目標を掲げてそれに向かって動き出す大きなチャンスととらえる以外にありません。

デザイン分野だけではなく他の分野、工学も社会経済も文学も同様の状況におかれています。今日のテーマであります「地域の創造力」の源泉の要（かなめ）は、例えば全国組織をもつ教育機関などが変節（例えば撤退）する事態を直視して、「外」に依存しない、しっかりした自前の「地域の教育研究体制」です。その確立への第一歩を踏み出す時期だ、ということは間違いありません。

言葉足らずですが、5分というプレッシャーから、このへんで一度区切りませぬ。

**小林** 渋谷先生、ありがとうございます。5分と言わないとたぶん1時間くらいに延びちゃいそうなので言ってみたくてすけれども(笑)。

私は、なんかこう、伏線として最終的に教育の問題も話したいなと思っていましたが、まず東海大学の問題を出していただきました。それは後ほどまた考えたいなと思います。長原さんが、実は、昨日、中小企業家同友会のこういったようなパネルディスカッションの中で、ず



渋谷 邦男氏

1984年より北海道東海大学芸術工学部教授。2002年3月北海道東海大学を退職し同年4月より札幌市立高等専門学校校長に就任し2006年3月退官。現在まで旭川デザイン協議会初代会長を含め数多くの団体役員を歴任。現在、北のデザイン研究所所長、東海大学名誉教授

いぶんと教育のこと、あるいはモノ作りのヒト作りということを強調しておられました。今日は仲間内のようなものですから、少し気楽な感じで家具業界のデザインのヒトの現状のようなどころをお話いただければ幸いです。

## 「ヒトづくり」には行政の力も必要

**長原** おそらくここにお集まりの皆さんの中で家具に最も長く携わってきたのが私じゃないかなと思います。

個人的なことを申し上げますが、職人修行で家具の道に入ってから今年でちょうど60年なんですね。長い道のりだとは思いますが、しかし過去を振り返ってみて、60年というのは相当長いと思いつつも、何か非常に短かったような感じもいたします。

その中で、デザインという創造する力、デザインというものを認識してからでももう50年以上は経っているんですね。それはこの中にも書かれております

とおり当時の行政が木工芸指導所というのを作って、そこに松倉定雄さんという方を所長にお迎えしたという、たいへん大きな動機付けがあったわけです。私もその当時、日常的には鉋を持って工場で働いていたわけですが、デザインという言葉も聞いて何か大きな扉を開けていただいたという実感があります。おそらく私は松倉先生に出会っていなければ、ただの職人という職人さんに悪いですが、そういう人生だったと思いますけれども、実にこのデザインを学ぶことによって世界が広がっていった、感性として自分の人生が世界まで広がったということがありますから、実にこの行政の力、行政がその時に何をしたかというのは非常に大きな力を持つものだなということを私は実感しているわけです。

そうはいいながらも、自分自身が経営者となって小さな会社をスタートさせてみて、その中で私はデザインというものを重要な戦略として企業活動の中に取り込んだ。そしてまた、それを地域にも発展させたい、地域のデザインスピリットを高めなければ本物にはなれない、というようなことからいろんなことをやってまいりました。それがIFDAというデザインコンペであったり、そしてまた10年前にスタートしたこの旭川デザイン協議会であったりということにいくわけですが、これはあくまでも地域の全体のスピリットを高めていこう、それが世界のレベルで前に進もうということなんですね。

そういう過程の中で、私は東海大学というものがあったからこそこういう活動ができてきたなということをしみじみと感じているわけです。この東海大学が旭川にキャンパスを作ってくれたというのもやっぱり行政の力というものが大きく関わっているわけですから。

そして私が期せずしてというか、海外に修行の場をいただいたというのもやっぱり行政の力なんですね。折に触れて、あるいは私個人の人生の中でも節目ごとに行政の力を得て今日までやって来たということになるわけです。

そして今、その重要な一角として存在していた東海大学が消えようとしてい

る。このまちから無くなろうとしているわけですね。これに私はとっても大きな危機感を持つわけです。たいへんこのまちの将来にとって多大な損失になるであろうことが私にはかなり目に見えるんですね。

しかし、じゃあそういう危機感を多くの市民に共有できるかという、そうでもないなあという感じがありますし、そして今現在の行政というかトップリーダーと言っていいのか分かりませんが、そのあたりもまだその危機感が非常に乏しい。実感として持っていらっじゃないんじゃないかという懸念を持つわけです。

もう2週間後には市長選挙があるんですね。このまちの新しいリーダーを選ぶということになるわけですが、どなたを選ぶのか。3人の候補予定者がいらっやいます。その3人の候補予定者にご出席いただいて、昨晚、東海大学が失われることに対するその問題というものをテーマとしてシンポジウムを開いたということがあります。今朝の北海道新聞をご覧になった方もいらっやと思います。しかし、お3人の候補予定者の中で、本当にこの問題をまちの今抱えている最大の問題だというような認識は持っていらっやる方はいないように感じてしまうんですね。さかんに何か防御的な逃げを打つようなところがあるんです。本当に残念なわけなんです。

ですから、あまり選挙の話をするとは生臭くなりますからやめますけれども、しかし皆さん、本当にこのまちが世界の中で、あるいは東アジアでという限定された地域の中で旭川の将来を考えたときに、これはいかにして感性を高め、知性高いモノ作りをやるかという、ここが大きな決め手なんですね。

そのためにはやっぱりヒト作り、教育です。これを力強く進めなきゃいけない。そのことによってまちのブランドデザインというのは前に進むんですね。ブランドデザインが先か教育が先か、これは鶏と卵みたいなものですから、両輪相まって行かなければならないわけですね。

しかしそのへんの認識が、今、このま



長原 貴氏

1963年から旭川市海外派遣技術研修生として西ドイツに約3年間滞。帰国後、1968年(株)インテリアセンター(現(株)カンディハウス)を設立、同社代表取締役社長、会長を務めるかたわら(社)日本家具工業連合会会長などを歴任。国井喜太郎産業工芸賞、北海道新聞文化賞ほかを受賞。現在、(株)カンディハウス会長、旭川家具工業協同組合会長

ちのトップリーダーあるいは多くの市民の皆さんにとってもまだまだとても普及していないというか、認識が無さ過ぎると私は思っております。

どうかここで、この場を通じて、皆さんはこの「デザインの力」というものをご存じの方ばかりですから、それをこのまちの空気の中に大いに吹き込んでいただきたい。そして、もうわずかに2週間しかないので、皆さんがもっともこのことを周辺の皆さんに話し掛け、訴え掛けてほしい、こんなふうに思います。

次のリーダー、このまちのリーダーによって旭川からデザイン、創造に関する、モノ作りに関する教育機関、大学が完全に失われるか、あるいは今の大学をしっかりと受け継ぐ形で今度は先ほど渋谷先生からお話しありました自前の教育機関を作るか、大きな境目なんですね。そのところを、皆さん、どうぞ今日のこの機会を通じて良くお考えいただいた上で次のリーダーを選んでください。とりあえずそんなところで。

**小林** ありがとうございます。

今の長原さんに何を問いかけてもこういう問題が出てきそうな気がいたします。全面展開していただきまして、このあと何をしゃべっていいかわからなくなってきましたけれども(笑)。

次にですね、また一言ずつお話をいただくと思いますが、小野さんのほうからいただきたいんですけども、この会で中心的に活動していただいているのは先ほどごあいさついただいた伊藤さんをはじめとしてグラフィック関係、宣伝関係の方たちが非常に熱心に働いていただきまして、ここに漢数字の十とローマ数字の10という、足す、掛けると読んでもいいかなと僕は思ったんですけども、いろんな人が足して、いろんな人いろんな人とが集まって、足すんじゃないかと掛けるような力を出したらいいなあと、素晴らしい含蓄のあるポスターを作ってくれたのが広告デザイン協議会会長の矢野野さんです。こういうことをずっとやっていただけてます広告関係の代表として小野さんに来ていただきましたが、小野さんには過去を振り返っていただくような形で今の旭川の広告関係の現状といったお話をいただければ幸いかなと思います。

## 様々なジャンルの連携で新しい価値を

**小野** 旭川広告デザイン協議会というのを立ち上げたのは昭和の終わり頃なんですけれども、広告というのは皆さん十分ご承知のこととは思いますが、本当に時代と共にいろいろと変化してきていますし、僕の生活の中で身近な存在です。

それは、デザインという形で言われたのははまだそんなに経っていないと言っても過言ではないくらい、我々の生活の中で身近な存在でありながら、認識はなかなかされていなかったという時代もありました。

我々広告の分野でも今でこそデザインと言っていますけれども、昔は図案とか、商業美術などと言いかたが変ってききました。どちらかというと、企業とかお

店から依頼を受けて作るという、そういう現場の中での仕事だったんでないかと思えます。これは私たちがそれに甘んじていたということもあるかと思うんですけども、東京その他、やはりメジャーなところでは既にかなり進んでいた部分もありますが、我々地方においてはなかなかそういったことは考えていませんでした。

この旭川広告デザイン協議会というのを作ったのも、そんなような昭和の終わり頃にコンピュータを使ったデザインといったことが話題になりまして、これが急激に変化したと。そのへんから我々の認識もこれは大変なことになるというようなことで危機感に変わってきたんじゃないかというふうに思えます。

デザインの、広告を作る形も変わりました。一人一人が全部最初から終わりまで作るという時代から、スタッフを組んでそれぞれの専門をより研ぎ澄ました形で一緒にやって作り上げていくという形になりまして、企業にも、それから地域の方にもそういったことを分かっていたきながらやらないと我々の仕事もなかなかうまくいかない。まして、それこそ生活そのものと結びつく広告宣伝というもの、内容や質、新しい技術等の要求されるものが強くなっていくということで、我々そのものが勉強して技術や質を引き上げてやっていかないと地域全体のためにもならず、我々も生きていく道が広がらないというようなことで進んできたと思えます。

旭川広告デザイン協議会が10年経ってからこの旭川デザイン協議会ができました。当初から広告デザイン協議会という名前自体が狭い意味合いだったんですけども、皆さんと話ししている中で、デザインというものの受け取り方自体それぞれがまちまちでした。自分の歩んできた道、振り返ってみれば分かるという部分がありますけれども、それぞれが違っていて、やはりここでデザインというものを自分たちの仕事の中でどういうふうに位置付けるかというようなことを真剣に話し合ったのもその時期です。

そして私個人的には、デザインというのは、乱暴な言い方かもしれませんが



小野 慶治氏

昭和33年から札幌の博展会社の(株)タバタ企画デザイン室にて、博展の企画プランからデザイン全般の仕事に関わる。昭和37年、(株)電通契約社員(クリエイティブ局)、昭和40年から社員となり旭川支局を主に、北海道支社(札幌)双方の仕事に関わる。平成9年、(株)電通北海道旭川支社長を定年退職後、デザインオフィス・オノ設立。旭川広告デザイン協議会名誉会長

ど、新しい価値を作るための見直しや発見をし、それが自分自身の力になり、皆さんに分配する。また、それを壊し再創造して、より高めていくという繰り返しのなかから生まれる新しい価値。デザインというのは価値を創るというふうに置き換えられるんじゃないかと、そんなふうに思っています。

それで広告デザインの分野もいろんな多種多様な業種との接触をしているわけですから、そういった見方をすると、新しい価値作りという形で見れば、ご商売をやっている方もあるし、いろんな形の職業・業種がありますけれども、あらゆる分野にそういった考え方を持ちながら我々が接触していくと世界が広がるんじゃないか、地域にも役立つんじゃないかと、そんなように思っ我々の会としては皆さんと勉強しながら進んできたというのが推移と現状です。

今やデザインという分野は本当にとどめを知らず何にでも当てはまるような形に思われるような世界になっていますけれども、これは本当に今、澁谷先生や長

原さんがおっしゃったとおり、政治や我々の生活そのものの関わり方に深くこれからはより強くデザインはその地域との関わりを持たねばなりません。

東海大学の話も出しましたが、一般生活者も政治家も、特に市長さんは本当にデザイン感覚を持った考え方でもって、広く、そして深く、人が生きるとか、それから生活をしていくという、そういう分野に取り組んでほしいと思います。

一人の人間に例えれば、狭く深く専門的に追求するということがありますけれども、やはり共通する一つの価値を見出して進めていくというようなことで考えていただきたいし、各職業のいろんな人たちそれぞれがそういう考えを持ちながらお互いに、今コラボが流行っていますけれども、そういう協力し合う、これからの新しい連携システムが必要です。そういう中での役割が私たち広告デザイナーが一つのキーワードの仕事でもありますし、皆さんもそのような考えを持ちながら、これからの生活の中で、職業の中で取り入れて考えていっていただければと思います。

これからは地域との関係はもとより、学校、研究施設も含め若い人たちの育て方など多々ありますが、地域、ジャンルを超えた連携による協力ができる新しい考え方が今必要です。

いろんなことがありますけれども、そういった新しい、周りにとらわれない新たな発想、新しい価値を見つけるというような、今こそ根本的なことが大事でないかなあとつくづく最近考えております。ちょっとはずれているところもありますけれども。

## デザインは地域に対して何ができるか

**小林** どうもありがとうございました。

小野さんのほうからデザインは新しい価値を作るというようなことで、一つは広告宣伝というグループを作って、その10年後に旭川デザイン協議会という形

のものを作って、実はこれはたぶんこの地域の協議会さんも元々はある分野のものだったのが連合していった一つの大きなジャンルを超えたものになっていくというそういった流れを持っていたんだろうなという感じがいたします。それが今必要とされているというようなことだと思います。それによって総合的な生活ビジョンを持ったデザイン全体ができていくんだろうなと、そういうお話しだったように思います。

さて、さらっとした問いかけをいたしましたので、それぞれの方がもうほとんど結論まで全部言っていたという形になっていますけれども、澁谷先生にこの旭川デザイン史というものの一番最初の旭川デザイン史総説というものを書いていただきました。その中に発展期、挑戦期、それから創造期というようなことが書いてありますが、今から少し未来を見通して、デザインって地域に対してどんなことができるんだろうなというようにお話を少しいただけたらと思います。

**澁谷** お手元の「旭川デザイン史」の最後に、裏表6頁の年表があります。旭川のデザイン史をどこから書き始めるか迷いましたが、「前史」として旭川村ができた時からのスペースを用意しました。

デザイン協議会の歩みは年表4頁目に協議会のマークがありますが、そこから旭川デザイン協議会の歴史です。その前に先人たちは様々な活動をこの旭川で展開してきたのです。日本全体で見ますと、旭川村ができた時点ですでに中央のデザイン活動は始まっています。デザイン総史の項で述べましたが、北海道ないし旭川の第二次大戦前の記載事項はごく僅かです。アイヌの人たちが始めた熊彫りは不特定多数の人を対象にした先がけですが、これはデザインよりももう少し広い意味のモノ作りの意味で…。

旭川のデザイン史の始まりはいつか、二、三の方にもお尋ねして、1955年を始まりとしてそれから「導入期」としました。このスタートのきっかけをつくったのは、長原さんのお話にもありましたが、前野与三吉初代旭川市長です。そう、前史では旭川市以前の市来源一郎区

長が重要な仕事をしました。結果的に松倉定雄先生を富山に派遣するという一連の留学制度、人材育成制度を作ったのです。ポイントポイントに行政の長が人材育成などの手を打ち、それに呼応する形で民間の方が旭川を前進させるアクションを起こしてきました。

1955年は、松倉先生を国の機関から旭川に呼び戻した年で、そこに長原寛さんが関係してきます。全国的には東京松屋にグッドデザインコーナーができており、デザインが社会の中で大手を振って



活動をすでに展開しておりました。

この時期、小野慶治さんが、東京から戻ったグラフィックデザイナー中村十三男氏に師事しています。小野さんは工業高校で建築を学ばれたのですがグラフィックデザイナーとの出会いが転機となり、札幌に行き博覧会関係のデザインの仕事に入ります。これらを導入期と位置付けました。

旭川にデザインがほぼ定着した導入期の次は「発展期」です。

1968年から1988年、これは旭川の家具メーカーが問屋の強い支配から脱して、自ら商品を企画するようになった時期です。自ら、又はデザイナーと共同で家具開発を始めました。長原さんの会社は、当時高級家具のメッカとして熱い視線を浴びていた小田急ハルクでオリジナルの家具を売り出しましたが、これがまさに旭川の発展期のスタートです。それに続くように各社がデザイナーを起用します。

同時期、木工芸分野では、工芸センター、前は工芸指導所でしたが、デザイナーのパイオニア秋岡芳夫さんを招き、そ

の指導により、ベテラン木工職人やデザイナーが旭川独自の優れたクラフト製品を作り始め、旭川クラフトデザインが確立されます。グラフィック分野でもウターデザイナーにより旭川にデザインスタジオが次々と開設されます。

それから次が「挑戦期」です。これは視野を広げて、技術を高度化してデザインのさらなる発展を目指すために、所謂中央のデザイナーを呼んで話を聞くというような研修の域をはるかに超えて、旭川は独自の試みを1989年から始めま

す。ひとつは、小野さんの話にありましたが、押し寄せるCADなどデジタル化の波など新たな状況に、今まではライバルだったデザイナー同士が手を組み、正面からぶち当たっていく活動です。工芸デザイン協会もこの頃生まれ、全国各地で旭川クラフトの展示販売活動を精力的に始めます。IFDAもこの頃立ち上がりります。東海大学は大学院を開設して、研究活動を全国の学会を舞台に展開します。

これらはどれも、地域で手を組み国内外に広く目を開き、新しいステージを自らつくる、まさに挑戦なのです。旭川デザインが外に向かって挑戦を始めたのです。

旭川市も行政の中にデザインを積極的に取り入れます。旭川開基百年の時にIFDAが立ち上がりりましたが、その前後から商工行政にデザイン係を設置して産学官の活動が活発化します。また同時期、景観行政が始まり、旭川の都市景観が目に見えるかたちで改善され、全国初の歩行者天国をつくった都市としての先進性に一層の磨きかけられます。

このようにして、旭川は北海道の中で突出した「モノづくりとデザイン」都市になりました。24年にわたり行われた北海道主催の「北の生活産業デザインコンペティション」で最高賞を、旭川デザインが札幌を上回るその半数を獲得したことは、それを如実に物語っています。

そして2000年から「創造期」に入ります。各分野の団体はできましたが、今度それが一堂に集まり、行政も含めてさらに大きな一歩を踏み出すのです。挑戦はこれから続きますが、旭川デザイン協議会が上川倉庫を再利用したギャラリーを拠点に誕生し、それが一つの創造空間となり、また創造の火付け役となり、激変の時代の新たな創造活動を模索し展開する段階と、これからを捉えました。

「創造の対象」は東京、大阪など本州のデザイン活動とは全く違い、旭川ないし北海道という「地域」です。地域の文化、地域の生活と環境、地域独自のデザインの形成で、これにはこうすれば良いというような雛形はなく、創造しなければなりません。まして東京から講師を呼んでも効果が期待できません。時代が要請する新しいテーマなのです。時空間がぐっと縮まった世界の中で旭川を考えるわけですから、より国際的な視野が必要で、IFDAはそのための貴重な財産といえましょう。そして、自然と一次産業をベースとした旭川的生活デザイン研究にもっと力を注ぐ必要があります。

しかし、大きな問題が生じました。デザイン史年表の三段目に教育研究機関の活動が記されていますが、上下の産業、官公庁とリンクしてこれまでの歴史を創ってきました。東海大学芸術工学部、それに教育大学の芸術分野が旭川から撤退しますとこの欄がスカスカになるということの意味しております。長原さんがおっしゃった「欠ける」ということのその影響の大きさは、この年表からも一目瞭然です。

東海大学が撤退する原因はいろいろありますが、一つに私立大学の宿命的な高額の授業料があります。東海大学は年間授業料約127万円ですが、国公立は約53万円の授業料です。このハンディは不況の今には大変に重く応募者減につな



がりました。これらにより地域を支える次世代に教育の機会が無くなることは大変なことなのです。

旭川デザイン史に「デザイン史をつかった人々」のアンケートがありますが、デザインの道に進んだ理由に多くの人が教育の影響を挙げています。

時代がこれから必要とする地域の創造活動の展開と、地域の未来を担う人材育成の両面から、旭川はまさに正念場に立たされているといえます。

## 旭川デザイン協議会のこれから

**小林** ありがとうございます。

だいぶ時間が押しまわって、長原さんと小野さんのお2人には、今のよ

うな観点から、先ほどお話の中にもあったんですけども、このデザイン協議会がこれからどういう方向で物事を進めていったらいいのかというようなことに対してのお考えを大先輩として我々に投げかけていただけたら幸いなあと、そう

いうようなことを思っておりますけれどもいかがでしょうか。

**長原** そうですね、いずれにしても何らかの形でこの教育というものを続けなきゃいかんですね。どういう形にするかということになります。そしてそれと相まって産業界が知的な方向へ進むわけですから。グローバルな時代の中で、特にアジア、東アジアという地域を考えたときに、日本の産業、日本のモノ作りというものは限りなく知的な感性で付加価値を高める、限りなく高める、そういうことをやらなければ生きていけないんですね。これは。だからこれはやはりこのまちに住む人たちの力によってそれを推し進めるしかないんじゃないですか。

東海大学の火は消える、これはもう厳然たる事実でしょう。それでは今度は自力でこれをどうするのかということを実際に真剣に考えなければいけないということだと思います。それには新たな教育機関を、どんな形にせよこれは作っていかねばならない。これは我々も含めて次の世代の人の一番大きな仕事じゃないでしょうかと思います。

**小林** ありがとうございます。

結局、結論がどうしても東海大学の話になっていくわけですが、

**長原** 無論です。

**小林** 正確に言うと撤退ではないですよ。東海大学は来年から募集を停止する。旭川のキャンパスをどうするかはまだ決まっていない、というのが正確な東海大学の公式コメントだというふうに思いますけれども、何はともあれ…

**長原** 口を挟んで申し訳ないけど、ハードなものが残っても何もなんのです。

**小林** ええ、それは。

**長原** 問題は理想とか精神とか理念ですからね。それが生きていけばなんとかあるんですね。ハードが残っているだけでは何の役にも立たないということ。

**小林** その話はこれから延々とじゃなくてもかなり深い結論を目標にしながら進めていかなければならない話になってくるんだろうなと思います。

時間があまりありませんので、最後にまた小野さんのほうに振らせていただきますけれども、デザイン協議会、こうい

った団体が、今、地域でもってさまざまな問題を抱える中でどんなことができるのかというようなことについてのお考えをいただきたいと思います。

**小野** この協議会に関わっている方々というのは、かなり意識的にも自分のものを持っているという方が集まっています。職業もいろいろですけど、考えもいろいろ、好みもいろいろというそれこそ多士済々の方々だと思うんですけど、やはり地域を良くする、自分たちも高まるというとき、一人一人が意識をどう持つかということに関わってくると思います。まして、一人一人ではできなくても集まればそれが二倍三倍になる。新たな発想、それこそ先ほど言いましたけれども新しい価値も見つかる。そういったことで、デザイン協議会が提唱して始めた仕事の一つに三都市交流というのがあって、旭川と函館と帯広さん、今日もみえていらっしゃるんですが、今も引き続きやっている活動なんですけれども、こういった地域同士のつながりもさることながら、一人一人が知っているというつながりというのは全国、世界にあるわけですから、そういったものを有効に活用する、何かそういう手立てみたいなことが協議会としての一つの役割じゃないのかなと。

それから、地域に関わる、特に行政の方にお願したいんですが、そういった基本的なまち作りの目標といますか将来像みたいなことを早く目に見える形でもってみんなで作って上げて、目標を持ってみんなが今言ったような気持ちでもって力を貸していただければこの地域もますます良くなるんじゃないかと思うので、こういった協議会を拠点にしてこれからもみなさん力を合わせてまち作りとかそういったことでやっていければというふうに思いますし、みなさんにも是非お願いしたいと思います。

**小林** どうもありがとうございます。

**澁谷** ちょっといいですか。

**小林** 澁谷先生、どうぞ。

**澁谷** これからの地域デザインのポイントですが、まずジャンル内で互いに手を結んでみました。グラフィックは広告デザイン協議会、クラフトは工芸デザイン



協会と、そしてジャンルを超越した組織である旭川デザイン協議会に結集したのですが、歴史から学びますと、異なるジャンルが結合する、必要に応じてジャンルの壁を、より低くまたは取り除くことがポイントだと思います。例えば衣、食、住の間で。小林先生は昨年「食とデザイン」の結びつきを試みましたが、農業を基盤とする旭川ですから主要テーマといえましょう。また、都市の背景や規模に合った「福祉とデザイン」「生活文化とデザイン」の追求が特化した「モノづくりデザイン」とともに地域文化を力強く形成していくと思います。

このところ政治の混乱が新聞を賑わしておりますが、一人として文化を語る政治家は居ません。中央も地方もマスコミも、今そんなこと話してられるか、という風潮で、大変嫌な風潮です。こういう時こそ、地道にデザインが、衣、食、住そして他のジャンルを結びつけ「地域文化」を具体的なものにして、充実した日々の地域生活につなげることが、大切だと思います。

**小林** どうも澁谷先生ありがとうございました。最後締めていただいたような形になりました。

時間がありましたら、小野さんから三都市の話も出ておまして、そちらに三都市+1の会長さんたちが来ておられますので、一言ずつと思いましたが、時間もありませんので。

実は、今、澁谷先生がおっしゃったこととも関係して、この間、金澤さんの所、帯広に行かせていただきまして、たいへん感心したことが一つ。それは帯広の地元の方たちとそれから金澤さんも含めてでしょうけれども外からいらした方たち、帯広の場合はかなり世界的な仕事をなさっている方がたくさん集まってこられている。そういう人たちが地元の仕事もそこでやり、地元の人たちのやったことを認めながらその人たちと一緒に仕事をしていくという、そういう一つの帯広の風土のようなものを感じました。我々の所でもそういうことは勉強すべき事なのかなと思って、あのとき参加させていただきました。

そういうことも含めてですね、今日はお三方から、最終的には大学が無くなるのがだいぶ話題に出てきておりますけれども、実はお三方の中のお話にもありましたように、これはチャンスだという考え方、これが転機だと。そういう考え方を我々は持つことによって将来が見えてくるんじゃないかなという感じがしております。

このあとの懇親会の中でまたそのようなお話を皆さんとしたいと思っておりますのでどうぞよろしく願いいたします。

今日は不手際な進行で申し訳ございませんでした。どうもありがとうございました。

**伊藤** 見事に時間ピッタリで。皆さんありがとうございました。

引き続き、この会場を出られて隣の会場で表彰式と懇親会の会場を用意しております。皆さん随時移動をお願いいたします。どうもありがとうございました。

報告

## 旭川デザイン協議会発足10周年記念式典

日時／平成22年10月22日18時～

会場／旭川ターミナルホテル

一部／パネルディスカッション

二部／表彰式・懇親会

第一部のパネルディスカッションに続き、第二部では、表彰式の後、懇親会を開催。西川将人旭川市長をはじめ、東京、札幌、帯広、函館などからも多くの方が駆けつけてくださり、なごやかな懇親の場となりました。

長年にわたり、旭川デザイン協議会の活動に貢献された、長原 實氏、小野慶治氏、澁谷邦男氏、桑原義彦氏に感謝状と記念品が授与されました。



西川 将人旭川市長



北海道デザイン協議会会長  
杉山 宗英様



とちち帯広デザイン振興協議  
会会長 金沢 和彦様



函館デザイン協議会会長  
渡辺 譲治様



(社)日本グラフィックデザイ  
ナー協会北海道地域代表幹事  
佐藤 正人様



札幌アートディレクターズ  
クラブ代表 佐々木 慶太様



旭川デザイン協議会発足10周年を記念して旭川のデザイン史「旭川のデザイン史をつくろう」を発行。

報告

## 旭川デザイン協議会展 2011

開催期間／平成23年1月5日～19日

会場／デザインギャラリー

今回は全会員参加の「サイコロ」をテーマに展示。

会員紹介ポスターも制作。期間中の来場者数は329名。



報告

## 大竹伸朗デザインセミナー

平成23年1月31日 午後7時～

会場／チェアーズギャラリー (参加者72名)

### 「大竹伸朗デザインセミナー」を開催して 勝浦恭子

「えっ、ほんとに大竹伸朗が旭川に来るの?」そんな声とともに開催した「大竹伸朗デザインセミナー」(1月31)。1週間前の緊急告知にもかかわらず、会員以外の方も含めて、定員を大幅に上回る70人が参加しました。



大竹伸朗さんは、いわずと知れた現代美術の最先端を疾走するアーティスト。近年は、2006年の東京都現代美術館での「大竹伸朗全景1955-2006」や、瀬戸内海、直島の銭湯「I・♥・湯」が話題を呼んでいます。

そんな、超大物で超多忙な大竹さんのセミナー開催のきっかけは、昨年、磯田憲一さんに講演いただいた「君の椅子」プロジェクト。大竹さんが2011年度のデザインをすることになり、打合せで来旭するという話を聞き、「ぜひADAでお話したい」と勝浦が強引にお願いした次第です。幸い、快く了承いただきましたが、細かな打合せもなく、大竹さんは「空港から拉致されてきた。何を話そうかな」と困惑気味でした。で



も、トークが進むとともに調子が上がり、アーティスト大竹伸朗の創造の原点をかいま見ることができたと思います。また、「君の椅子」について「未来の時間にかかわることができる喜びが沸き、ぜひ挑戦してみたいと思った」と話していました。

大竹伸朗デザインの2011年「君の椅子」は、5月19日に道立旭川美術館でお披露目予定です。これまで中村好文→伊藤千織→前川秀樹→小泉 誠→三谷龍二と続いてきた「君の椅子」。今年度の大竹伸朗デザインはどのようなものか、非常に楽しみです。